

傷付いた人々の時代へ突入せよ： 日本社会における家庭の崩壊が生み出したものに立ち向かう

物語

かつて教会は、後悔の念を持って過去を振り返った。チャンスが戸を繰り返して叩いたことがあった。ドンドンと大きな音を立てて叩きさえた。しかし、その時、教会は自分の仕事で忙しかった。それは、日常の仕事であり、心地よい仕事であり、そして、かなり長い間あまり成果を上げることのなかった仕事だった。

時に、国全体は深刻に助けを求めている。何世代もの間、未解決のままの問題の周りをさまよい、それが何の問題でもないかのように装っている家族が生み出し、自分たちの内に溜め込んできた痛みを癒す方法を求めているのだ。しかし、事を隠して置くにも限度がある。やがてそれらはひどい大爆発を起こすのだ。それが常識というものだ。

やがて社会は、新しい、正直な雰囲気をもつようになった。人々は助けを求めて走り、その必要を満たすべく、まるで原野を覆う洪水のように、さまざまな商品が開発された。海外からの、パッと輝く自己啓発の方法、人々の問題に答えるべく新たに改良された神道や仏教、人間の潜在能力を開発する運動、そのほかあらゆる風変わりな働きかけが現われ、空腹の魂を甘ったるいお菓子で満たしてダメにし、大衆の財布を空っぽにしていた。

教会はようやく、何が起きているか気づき始めた。まるで恐竜ブロントサウルスのように、疾走する野生馬を捕らえるために突然動き出した。しかし、教会は歳をとり過ぎてしまい、重くなり過ぎて倒れた。そして、間違った方向に導かれる大衆が大量に殺されていくのをただ見ているほからはなかったのだ。教会の目からは大粒の涙が溢れ出し、しわのよったその頬をゆっくりと流れ落ちた。そして、それが地に落ちた時、雷が鳴った。そのとき、教会は目を覚ました。夢だったのだ。それは将来起こり得ることの幻であって、まだ現実になってはいなかった。時間はまだ残されていた。

時代を深く読む

ウルフ・ウォルフエンズバーガーによると、ほんの少し歴史を見るだけで、「どの時代もそれぞれが自分の殻に閉じこもっていたために、忠実な人々にとってさえも、時のしるしを見分けるのはいつも難しいことであった。」¹ということがわかるという。かくして、私たちは二つの質問をするに至る。すなわち、「私たちは何に没頭しているのだろうか?」と「私たちが生きている時代はどのようなものなのか?」というものだ。

論理的には、この2つの質問のうち2つ目を最初に取り扱うべきである。時代とは、おそらく、私たちが認め得るよりもはるかに厳しいものだ。今の時代は、私たちが忙しくしてい

る余裕などのない、極限の知恵が求められている時代である。というのは、もうずいぶん前に戸はたたかれていたからだ。

家族

精神病の原因は家庭にあるといわれてきた。それが事実だとすれば、精神病の薬を作る製薬会社は大もうけするだろう。日本では、100万人を超える人たちが「引きこもり」で苦しんでおり²、多くの人たちが心の問題というよりは家庭の問題だと考えているこの病気に関して日本は他の国を凌駕しているのだ。

引きこもりは家族の中の交流が破壊された極端なケースだが、平均的な家族でもコミュニケーションの貧しさに悩まされている。妻に離婚届をつきつけられたとき、多くの夫はその意味がわからずに驚きのあまり言葉を失う³。離婚が社会的に受け入れられるようになるにつれて、年毎に離婚の数は増加している。この点に関して、30歳代の夫婦で、55%が「セックスレス」と呼ばれる状態にあると、よく読まれている女性雑誌は報じている⁴。男たちは妻以外ならどんな女性にも性的魅力を感じ始める。この病を治すのは大変難しい。

子育ての傾向には、不安の増加が含まれる。今日、71%の母親が自分たちの子育てに不安を覚えている⁵。そして、多くの人々が、不安の原因について見直している。かつては、常識はずれの暴力の増加によって、自分たちの子どもがその犠牲者になるのではないかということが両親の心配であった。しかし、今や心配はもっと深刻だ。彼らは、自分の子どもたちがそのよう暴力の加害者となってしまうのではないかという恐れを持っているのである⁶。

子育ての問題は子どもの問題を生み出すので、将来は問題が多いと思われる。昨年1年間に政府に寄せられた子どもに関する相談は、記録的な24,195件を数えた⁷。1990年に警察が幼児虐待の統計を取り始めて以来、警察はいまだ介入を避けてはいるが、その数字は23倍に膨れ上がった。この傾向は身近に見られる。この原稿を書く数週間前に、6歳の男の子の遺体が、私たちの住む市を見下ろす山の中から発見され、少年の母親が拘留されたのだ。彼の顔は鼻とあごが折れていた。この話をいっそう悲しいものにしたのは、苦しみを受けた少年が、その身体に障害を持っていたことだった。

2001年になって、日本はようやく配偶者による虐待に気づき、その問題と戦う法律を制定した。このような法律の制定は、工業化された国としては一番遅く、西洋の国からは数十年の後れを取っている。配偶者による虐待の問題はどれくらい深刻なのか？1999年に内閣が行った調査によると、妻たちの5分の1が肉体的な虐待を経験しており、20人に一人は生命に関わるような暴力にあっているということだ⁸。私が最近行った結婚セミナーで、一人の女性が自分の経験を私に話してくれた。彼女は20年にわたって夫から暴力を受けた結果、もう我慢の限界に来ていた。結婚当初、彼女が生まれたばかりの赤ん坊に授乳している時、彼女はガラス戸に叩きつけられ、彼女も赤ん坊も割れたガラスの破片をシャワーのよ

うに浴びたそうである。その赤ん坊はいまや成長して10代後半になり、自分の父親を殺すつもりでいる。暴力はその家族の中で完全に循環している。

私はまた、ある年配のご婦人のことを思い起こす。礼拝の後、彼女は足を引きずりながら私のところに来て、40年間誰にも話さなかったことを告白した。彼女の夫はいつも彼女を殴り、その暴力のせいで彼女の足は不自由になってしまったのだ。回復しつつある他の被害者の専門的知見と養いを得られればと、この女性のためにサポート・グループを探して、私はその市の牧師たちに相談した。ところが、牧師のうち誰もそのようなグループの存在を知らなかったのだ。昨年、私はその地域で再び説教の奉仕があった。ちょうどその数日前に、その教会の近くに住む女性が夫によって殺された。彼女は、その教会のメンバーの友人だった。私たちは、これらが血の通わない統計上の数字でないことを覚えなければならない。キリストはこの人々のゆえに涙され、私たちはこのような人々に取り囲まれているのだ。教会の内でも外でも結婚生活における必要が叫び声を上げている。しかし、これらの必要が認識されることはまれだ。一つだけ確かなのは、ここで求められている必要が、ほんの数人で満たせるようなものではないということだ。しかし、数百の人々が増え広がり続けるなら、話は別である。

セックス

日本の歴史の中で悪名高き時代に、軍部の指導者たちが推定20万人の外国の女性を強制的に性的奴隷とした⁹。この犯罪の影響と、その根源的原因は今なおこの社会に生きている。日本における売春の問題は先進国の中で最大だ。アメリカ合衆国と欧州では、14歳～48歳の男性が売春婦と性的関係を持つ比率は1～2%だが、日本では信じられないことに14%にも及んでいる¹⁰。

性に関して特に不穏な傾向は、いわゆる「ロリータ症候群」と呼ばれる、女子中高生やただの子どもまでがセックスの対象と見なされる性的嗜好の蔓延である。さらに不穏なのは、このような傾向が一般に既に受け入れられてしまっていることであろう。2002年では、インターネットのデート・サイトの半数が児童売春に関するものだった¹¹。どこにでもある風船ガムの自動販売機で裸の女子高生の人形が買えるという、明らかに常軌を逸した風船ガム・ポルノの出現は、だれを対象としたものなのか混乱させられるものだ。しかし、最近では、セーラー服姿の女子高生は年をとり過ぎていると見なされている。13歳以下の少女との行為には10万円が必要とされる。平均的な女子高生の3倍である¹²。

ここで私たちは、再び傷ついている家庭に戻ってくる。母親の生活が家庭を中心としなくなり、母親が家にいるのが当たり前だったころより以上に父親は家になくなってきた。そのような悪化の一途をたどる家庭環境で、多くの子どもたちは、物質的に甘やかされるが、心の中は空っぽで育つのだ。情緒的な飢え渴きと、認められないことへの恐れを抱いて、彼

らは思春期を迎える。そして、子ども時代に持てなかった「スキンシップ」をセックスの中に求めるのだ¹³。

猛烈に広がる無差別なセックスと、性的感染症（S T I）の増加は警戒を要する。若者たちは、恥じらいもなく、単にセックスのためだけの知り合いのことを「セックス友（とも）」という言葉で呼ぶ。多くの若者が何人ものセックス友を持っている。最近の調査は、渋谷地域の10代の若者の43%が、少なくとも5人のセックス友との関係を同時に維持していることを示している¹⁴。しかし、たとえ今はまだわからないとしても、このようなライフスタイルがもたらす結果は甚大なものに違いない。

こころの状態

最近のある日曜日のこと、話をする事になっている教会への道の途中、私はある中学校のそばを車で通りかかった。その運動場は、忙しそうな子どもたちでいっぱいだった。そのとき初めて、私は日本の社会が若者に何を教えているのかという現実気がついた。日本には聖なる日が存在しない。学校の活動が定期的に土曜日にも侵食してくるので、家族の日は存在しない。日曜日さえも消費され、霊を休める日がない。学校が声高に示しているモデルは、家族や神に高い優先順位を置かないということだ。だから、学校が感情的な問題で満ちていても無理はない。次の世代はバランスという概念を欠いた存在として成長しているのだ。

バランスを欠いた人々は絶えず、感情的に取り乱している。労働者の62%は自分が深刻なストレスを抱えていると訴える。このような人たちの比率は増加しているにもかかわらず、精神的・感情的な健康を管理するためのケアを提供する会社の数は減少し、全体の24%に過ぎなくなっている¹⁵。恐らくそういうこともあって、5人に1人が睡眠障害を持っているのだろう。2002年には、2,687人の公立学校教諭が「精神疾患」によって休みを取った¹⁶。これは、その年の教師の病欠の50.7%を占めることになる¹⁷。

そういうわけで、人々は休みの日を持たず、夜も休むことがない。これは労役の悪循環であり、鬱の比率が危機的な状態にあるのも少しも驚くに値しない。岐阜大学によると、7人に一人が、最近では現代病の一つとされる鬱にかかっているという。しかし、18歳～34歳の女性の間では、その比率は33%にもものぼる¹⁸。もちろん、この研究そのものが既に7年前のものであり、事態はもっと悪化していると思われる。

この問題をさらに憂慮させる事実は、鬱にかかっている人たちの10人に1人しか専門的な助けを求めないということだ¹⁹。だから、多くの人たちは、いろんな問題が複雑に絡み合う毎日の生活の中でつまづいている。そして、自殺者の90%は鬱がその原因であり、日本は自殺に関する問題では世界のトップクラスであるということを考える時、目が覚める思いをする。2002年には5年連続で自殺者の数が3万人を越えた²⁰。無数のウェブサイトが自殺を奨励し、自殺の方法のアドバイスを提供し、集団自殺のために人と人を結びつけ、便

利な「自殺キット」さえ販売している。

日本からそう遠くないところでは、多額のお金を使わせる自己啓発セミナーを催す人たちが、北京からバンコックにかけてアジアの中でのルートを開発した。これらの国々の中の何十万という人々が、自分と両親との関係や、生育体験に問題があることに気づき、伝統的な方法が今日の感情的な必要にもはや応えることが出来ないことを知りつつある²¹。日本でも、このような状態になるのは時間の問題だ。既に深刻なヒビの入っているダムがいつまでもつかは分からない。

お金

短期間で終わった「バブル」期以前の数年間、労働者たちは家庭を犠牲にしてでも、成功するために狂気を生きた。バブル期においては、家族を犠牲にしてでも労働者たちは精力的に遊んだ。そして、今「ポスト・バブル期」において、彼らは、家族を犠牲にしてでも、仕事を維持することにあくせくしている。結局のところ、時代は厳しい。2002年、短大卒業者で仕事にありつくことが出来たのはわずか56%だけだった²²。この新しい、失業と明白な職不足の状態、小学生の子どもを持つ父親の72%は昼だけでなく夜も働き、51%は毎日終電まで働き、45%は毎週末働き、41%は仕事のためなら家族旅行をキャンセルするという²³。そして、そのような状態の中で、既に、父親の半数は午後9時以前に家に帰ることはない²⁴。

経済の将来も声高に警告する。2002年、全国の地価は12年連続で下落。2001年には、価格は1978年のレベルにまで下がってしまった²⁵。現在、2000の都市において行政サービスの提供が困難になり、合併か消滅かという危機に面している。GDPと比較した国の負債の比率は、1992年の68%から、2002年には148%にまで上昇した。1989年に株式市場が崩壊して以来、大変危険な比率で資金は株式市場から国債に移動した。年0.595%の利率の10年物国債は2013年までのマイナス成長を前提としており、現代の経済史では前例のない不景気が続くことになる²⁶。近い将来起こりうる2回目のバブルの爆発の可能性を何人かの専門家たちが示唆する時、私たちは身震いするのだ。

この国の将来にはまた、地球のどの国も歴史上今だ経験したことのないレベルで高齢者の面倒を見ることが重くのしかかる。この2年の間に、4人に1人の日本人は65歳以上になり、子どもの数はかつてないほどに少なくなる。2002年は2001年よりも15,000人新生児が少なく、女性1人あたりの子どもの産む数は1.33人²⁷と最低を記録している。2006年には日本人は民族として減り始める。SFの想像の世界でも、日本人の子どもを産む習慣や、その欠如などから、自滅は目に見えている。

子ども不足によってもたらされる確かなことが1つある。将来の労働力の欠乏は経済に大変大きな穴を開ける。ストレスで満ちた経済は、ストレスで満ちた家庭を生む。里親に出さ

れる子どもの半数は、虐待の犠牲者であり、里親に出される主な理由は、彼らの家庭の支配的な特徴として、経済的な悪化が挙げられる²⁸。現在、父親のいない954,900世帯のうち、ほとんどの母親たちはその家庭の経済と心の必要を辛うじて満たしているに過ぎない²⁹。

このように、社会と経済を簡単にチェックするだけで、ほとんどの人たちが持つ、言葉にならない恐れが確認される。厳しい時代が来ようとしている。このような時代は、第2次世界大戦後の日本に見られた心の崩壊に近づきつつある。それは希望を失った状態と、ホームレスの状態が猛烈にはびこった時代だった。そして、それはまた、教会が本当の心意気を証明することが出来た時代だったのだ。しかし、私たちは自問する。「教会はこの避けることの出来ない状況に果たして備えることが出来ているだろうか？」

行き詰まり症候群に直面する

ジョージ・ハンターの言葉を借りれば、「多くの西洋の教会指導者は否定されるべき存在だ。彼らはあたかも次の年が1957年であるかのように教会の活動を計画し、実行している。」³⁰ そして、これと同じことが日本でも言えるのではないかと思わされる。それとも、多くははまだ1977年のままで止まっているのかもしれない。当時は英語が大流行し、英語のクッキング・クラスでさえも素晴らしいアイデアであった。しかし、そのような方法がかつてはたくさんの実を残したとしても、ひとつの問題を提示している。これらの方法は、誰でも真似出来る働きモデルではなく、従って、日本人のクリスチャンから伝道の装備を剥ぎ取ってしまうだけでなく、今日猛威を振るっている（社会の）痛みに取り組むことに失敗するのだ。10年前、フォーチュン誌の500社のうち78%が、1991～1993年に事業の再構築を行った³¹。そこで、私たちは自問する。いったいこの10年間で、いや、1世代で、何%の教会が再構築をおこなっただろうか、と。たとえ良い意図をもっていても、何かが間違っていた。シモネ・ウェイルが喚起を促すように、「私たちはそれが良いことなのでそこに引かれる。しかし、最後にはそれに縛られる。なぜなら、それがなくてはならないものになってしまうからだ。」³²

私たちが日本において行き詰まっていることは疑いようがない。もう何年も前に最高の時を迎え、それから、急速に沈み込んでしまっている。しかし、その間、私たちの扉の向こうでは、（宣教の）機会の波が渦巻き、泡を吹いているのだ。現在、日本は世界のどの国にも見られないようなさまざまな機会を提供している。人々はいまだどの特定の宗教にも参加していないが（31%の人々が、幸せの追求のためには宗教が重要な役割を果たすと信じている一方、77%の人々は特定の宗教を信じていない³³）、キリスト教に好意を持っている。しかし、私たちは、このような状況に何もしないで、自分たちが行き詰まっていることを、社会が反応しないせいだとするのである。

行き詰まりは、聖霊の愛といのちを与える力の流れを妨害する障害物であるということが出来る。どのようにしてこの状態になったのか？ケネス・ホーステッドによれば、「行き詰まりには、いつでも、心理療法士が病理と呼び、神学者が罪と呼ぶものがある程度関係している。」³⁴ 私たちの罪とは何か？無関心？私たちの「病理」は何か？うまく機能しないことが証明されたシステムにエネルギーを注ぎ込む平均的な行き詰まり家族に似ている？（教会の社会からの）乖離の根はどこにあるのか？この地でなされているたくさんの働きを苦しめている、他の極端な強制する動きは何か？日本人の魂で裂けている傷の中に深く飛び込むことへの恐れなのか？もしそうであるなら、恐れによって、私たちは、神を経験すること、霊的覚醒において人々を導くこと、そして、本当の人間性を発見することが出来なくなってしまうのだ。障害を持つ人たちのための真の家庭を作り、ヘンリー・ナウエンのような人々を救ってきた、ジャン・ヴァニエの言葉によると、「皮肉なことに、私たちが最も人間であることを妨げているもの、それは恐れである。恐れは成長と変化を妨げるからだ。恐れは変化をきらう。恐れは現状維持を要求する。そして、現状維持は私たちを死に導く。」³⁵

しかしながら、教会が目指すのは、私たちの持つ恐れに直面して、時代に合わせることであり得ない。そのようにするのは、私たちに対する反対に迎合しているに過ぎない。もしくは、心霊的に時代の先を見据えて、将来構想を企てることも出来ない。（これはビジネスの世界ではよく行われている。今日の最先端のビジネスは心霊的なものになっており、将来構想に関するヒントを直感的に得ることに焦点を当てている。）教会が目指すものはさらにもっと大きい。教会が求めているものは信仰によってしか定めることが出来ない。つまり、望んでいることを保証し、目に見えないことを確信するように生きることによってわかる³⁶。教会こそ、この世の他の生き物とは違う生き方をして、この国の将来を物語るべきだ。教会は、ただ単に現状を捉えるだけでも、近い将来の構想を描くだけでもなく、現在大変うまく機能していることを捨てる準備をし、働きの頼みの綱となっていることを心の中では手放してしまうべきである。今日多くを生み出しているものが、明日には陳腐なものになってしまうことをよく知らなくてはならない。

私たちの将来が何であれ、一つだけ確かなことがある。私たちはこれ以上同じことを忍耐することは出来ない。根源的な時代には、根源的な変化が求められる。そして、「教会は、世界の中で違いをもたらそうなどという、つまらない、陳腐な夢を止めて、世界を変えろという神様のスケールの夢を見始めることが出来るだろうか？」³⁷という、レオナルド・スイートの言葉が私たちに衝撃を与える。恐らく、このことを達成するために私たちに与えられた方法は、私たちの周りや、私たちの内にあるはかりしれない大きな痛みと対決することだ。

痛みを通るべき道のりとして捉えなおす

私たちが最も必要としていることに行くまでに通らなければならないこととして、家庭内

の崩壊による痛みがあるだろう。しかし、私たちは、どのようにしてその痛みと直面するのだろう。「自然な教会形成」という研究チームは、50ヶ国の22,000の教会を研究し、そこで得た情報から導き出した、成長するため、教会が健康であるための8つの特徴を定義している。それらは、例えば、「権限委譲するリーダーシップ」、「賜物を中心とする働き」、「霊的感化を受ける礼拝」などだ。この8つの特徴全てが等しく重要だ。しかしながら、彼らが特に強調するのは、「もしこの中からどれか一つ、最も重要な原則をあげろといわれたら、疑いなく、スモール・グループの増殖だと答えるだろう。」ということだ。彼らは、これらのスモール・グループは、参加する人たちの目の前の個人的な関心に焦点を当てなければならないと念を押す。

ここで、本論の中心的な関心について述べることにする。すなわち、「心と家庭をいやすことに焦点を置いているスモール・グループは、この時代のもつ傷ついた状態と、教会の行き詰まり症候群に答えを与えることができるのか」ということだ。確かに、そのような全人的なスモール・グループは、このふたつの必要を満たすために欠かすことが出来ないものだ。たとえ、そのようなスモール・グループが死活問題であっても、一般には、そのような働きはよく知られていない。6年前にクリスチャン・ホーム形成のための学びをする2つのスモール・グループを立ち上げた後、私はそのことに気がついた。実験的にそこに参加したグループの人たちはそこで学ばれた内容について大変感謝してくださったものの、教会の中でそのような戦略を実行に移す場所はあまり見当たらない。スモール・グループ用の教材を用いるためのスモール・グループが存在しないのだ。そして、もちろん、スモール・グループを始めるためには、それらの教材は助けになる。これは、鶏が先か、卵が先かのジレンマなのだ。

もし、「スモール・グループが、人々を贖う神の臨在をイメージしたり、破壊的な人間システムを映し出す基本舞台だ」³⁸とすれば、ちょっと時間をとって想像してみよう。その都市の隅々に福音が届けられるために、1万を超えるスモール・グループが伝道チームとしてその都市いっぱい仕えている様子を。地域社会、事務所、工場、学校、病院、政府機関など、あらゆるところに浸透している³⁹。あるグループは悲しみの問題に解決を与える一大きな金融破綻を迎えようとしているからだ。あるグループは罪の呵責に解決を与える一数え切れない女性が中絶を経験し、数え切れない父親が子どもを無視したために思い代償を引きずっている。あるグループは恥に解決を与える一恥は、まさにこの社会を動かす燃料であり、子育てを基本的に支配している原理である。そして、あるグループは孤独に対して解決を与える一多くの人々がコミュニケーションに問題を抱えているからだ。しかし、これらは、地域教会の働きとして、家庭と心の問題に解決を与えるグループであることは確かだ。最低でも、これらのことが地域教会の活動計画の最優先課題となるべきだ。

このように言うと、多くの人たちは、「そのような家庭や心の複雑な必要のために、私たちはちゃんとした資格のある（つまり、学位を持った、公認の、プロの）セラピストが必要

だ。」と言うだろう。しかし、この時代、ポストモダンの精神性によって、人々は科学以上にもっと人をうなずかせる何かがあるということを認めているので、そのような時代錯誤の前提は鼻で笑われてしまう。カウンセラーであるラリー・クラブは強調する。「神の子ども一人一人の心の中には、全く悪いものよりも何か良いものがある。それらは、解放され、力を発揮するのをそこで待っている。」⁴⁰「教会生活に関する考えを根本的に見直す時が来ている。キリスト者の共同体のメンバー一人一人の内に神が置いて下さっている、人生を変革する力を解放することを中心とするべきだ。」⁴¹教会が遅ればせながら科学的な研究による治療に空騒ぎしている間に、この世は心霊的な研究を土台とした治療に取り組んでいるのは皮肉なことだ。私たちは職業的なカウンセリングを好むが、それはしばしば、せいぜい距離を置いた干渉以上のものではない。ナウエンは私たちを叱って言う、「リーダーシップのもつ大変大きな幻想は、砂漠にいる人間が、砂漠に一度も行ったことのない人によって導き出されうるといふものだ。」⁴²このような、科学を超越した場においては、まず、聖霊に満たされている、そして、次に、自分自身が傷ついたことがあり、最後に、リーダーから権限を委譲されている人が、最も資格のある「カウンセラー」なのだ。教会が最も必要としているのはそのような人たちの軍団なのだ。

だから、私たちの痛みを見、私たちの周りの人々の痛みを見る時、私たちは、自分の取るべき道として、「私は解決を得たけど、君はそうではない。正しい回答をあなたに与えるために、私はどのようにしてあなたを集会に導けばよいのだろうか?」とは決して相手に伝えない。(仮にこのように人々に言えば、彼らが集会に押し寄せてこなくても不思議ではない。)むしろ、私たちは謙遜に、それとなしに伝える。「私たちは大きな必要を抱えている。神はその必要を満たすことが大好きなんだ。今、神の所に行って、必要を満たしてもらおう。」

新しい理解を受け入れる

いい加減な遊び半分の気持ちで心や家庭の必要に応えようとするならば、逆放火を浴びることは間違いない。これはありきたりの問題ではない。フォレスターの法則によれば、「複雑な状況における改善のための努力は、かえって状況を悪化させる。悲惨な状況では、さらにひどいことになる。」⁴³この問題に十分に取り組んでいくためには、働きにおける新しい理解が必要だ。つまり、私たちを古い思考様式や行動様式に縛り付けている強制力から自由になることだ。今日の精神療法でよく受け入れられている考えによると、人々が非生産的なパターンにはまり込んでいる時、その原因は、彼ら自身のおかれている状況のさまざまな要素によって、強制的に、価値ある、健康な精神状態を促進するような方法で考えたり行動したりすることから遠ざけられているということだ。もし、最大の強制力が私たちの中にあるとするなら、それは、私たちを縛り付けている教会の文化なのだ。

心と家庭のためのスモール・グループを実際に始めることを妨げている、古い教会理解に

ある3つの強制力に私は気がついた。その中で最もよく見られるのは、「この社会の人々は、グループではそのような（深い）レベルで心を開いて分かち合うことがない。」という神話だ。しかし、私の6年を超える現場の経験から、そのような考えに反対する。「人々は親しい関係を渴望している。たとえ、その努力の途中でつまずいたり、しばしば自分で失敗したりするのだが、彼らはそれを欲しているのだ。」確かに、多くの人々が肯定的な会話を自由にすることが出来ないのだから、スモール・グループでの会話のやり取りはそのための枠組みを必要とする。もしそのような枠組みがないなら、そこでの肯定的な人生の変革もありえないし、かえって、否定的な会話のパターンが深まってしまいかもしれない。ある教会で、結婚セミナーの後、気軽なお茶の時間を持ったときのことだ。そこにいた男たちは次から次へと自分の妻の体重、容姿、性格、料理についての全くばかげたコメントを述べ、彼らはみんな、そうすることがユーモアであるといった様子だった。そういうわけで、ファミリー・ライフのホーム・ビルダー（クリスチャン・ホーム形成のためのスモール・グループのプログラム）を始めるときにまず決めなければならないルールは、「あなたの結婚生活について語る時、あなたの配偶者が恥ずかしい思いをするようなことは何一つ話してはならない。」ということなのだ。

私たちを前に進めることを妨げているもう一つの強制力は、この国においては、教職者中心の働きがその大半を占めているということだ。牧師や宣教師たちはこれまで、信徒に権限を委譲することを怠りがしろにしてきた。教会のもつ古い秩序を維持することによって、私たちはしばしば信徒たちの成長を妨げてきた。これは教会のメンバー一人一人の中にある力とキリストの体に対する私たちのやせ細った見方を示している。私たちは霊的な覚醒を祈ることが出来る。しかし、神は恵みの内にそれを保留にされるだろう。なぜなら、そのようにたくさんの方がキリストに導かれることがあっても、その流れをどのように導くのかはまだ私たちにはわからない。少なくとも今のような、教職者中心、教職者依存の教会の構造では。たぶん、私たちは謙遜に自分たちの限界を認める時が来ているだろう。というのも、資格を持ったカウンセラーさえも、「訓練を受けたカウンセラーがかなりのことをすることも確かだが、多くの場合、プロとしては認められていないが、成熟した人々によって、同じように、またそれ以上の働きがなされるのだ。」⁴⁴と認めているからだ。

プロの教職者が教会の働きをむさぼっていることに対する怒りや、全てのクリスチャンに権限を与えて働きをさせないということに対する怒りや、全ての信者の中にある霊的な潜在能力を解放しないことへの怒りが存在している可能性がある⁴⁵。ギャロップ調査によると、アメリカの教会のメンバーの40%は何らかの教会の働きを持つことに興味がある⁴⁶。たとえ控えめに想像して、日本においてはこの数字が20%であっても、いや、たとえ10万の人たちが強く、動かされたとしたら、この国は必ず変わる。リック・ワレンはこう述べている。「全ての教会は、支配のための仕組みを造るか、それとも、成長のための仕組みを造る

か、どちらを選ぶか決断しなくてはならない。」⁴⁷現在、私たちはひどいリーダー不足のために、リーダーとそうでない人の比率は危機的な状況になっている。リーダーを養成する環境作りはどうなっているだろうか？

そして、私たちを苦しめている最後の強制力は、私たち自身が、傷ついている人々を一定の型に押し込めてしまうということだ。(現実には、私たち全員が傷ついている人々なのだ。そして、これらの傷ついている人々のうち、自分たちの痛みを受け入れ、自分の中に統合した人たちこそが、いやしのための最善の器となるのだということを、私たちはしばしば忘れてしまうのだ。) このところの何年かの間、心理療法の伝統的な方法は綿密な調査にさらされている。心理療法は人々に特定の病理の名前を押し付け、レッテルを貼るのが大好きだという反対意見が出ているように、人々はレッテルではなく愛を必要としている。家族問題を扱うプログラムで働いている、「正規の教育を受けておらず」しかも「大変効果的な」ひとりの女性の言葉は警告する。「私には、病理学は人々を攻撃するような立場にあるように思えるのです。病理学的に人を扱うことはその人を攻撃することだと思います。私たちは病理学的に人を見ません。しかし、問題を無視することもしません。私たちが前提としていることは、ここに大変な大きさの痛みがあるということであり、私たちはそこに飛び込んで、出来る限りその痛みの一部でも緩和し、少なくとも、痛みを増し加えることなく、痛みに対して健全な敬意を払っていくのだということです。」⁴⁸

私たちの教会は、問題と戦っている人たちが、病気だというレッテルを張られたり、ある状態を持っているということで、権限を与えられないでいる一方、ある人たちは無傷であるという幻想を作り出すことで賞賛される場所となっていないだろうか。私たちは、すべての人を新しいレベルの正直へと導くことが出来るのだろうか？犠牲者、もしくは生き残った人であれ、そのような人々が敵と戦う凶器になるように、私たちは彼らに権限を委譲することが出来るだろうか？

このような、古い世界秩序によって抑圧されている状況で私が最も強く渴望しているものは物語だ。旧来の考えを切り開く物語だ。それは、教会の中で戦いの物語を声にする場だ。戦いの物語が全て勝利の物語であるわけではない。私はまた、意義深い出来事の扇動を渴望する。そこでは、心と家庭に何かよいことが起こっている。それは、新しい物語と新しい仕組みの、良く考えられ、そして一貫した結合だ。今日、教会を変えるためにはその物語を変えなければならない。そして、生活を変えるために、肯定的な行動のための仕組みを作るべきだ。

結論

私たちは「未来に過去を求め無意識の渴望」⁴⁹に取り付かれているだろうか？それとも、今の時代の傷ついた状況を、地平線の向こうに行くための飛び石として取り込んでいるだろ

うか?確かに、扉はしばらく前にたたかれた。しかし、私たちが神のスピードで動かなら、新しい未来を描く存在になるチャンスはまだある。ピーター・クリフトは、苦しみに関する画期的な著作の中で、「私たちの社会は、苦しみを避ける1000の方法を与えていながら、その問題に対して何一つ答えを与えない最初の社会だ。」⁵⁰と説明する。今こそ、この社会にその問題に適合し、乗り越え、真の意味で生きること始める、1万の場を提供するチャンスなのだ。

¹ William C. Gaventa and David L. Coulter, ed., *The Theological Voice of Wolf Wolfensberger* (New York: Howarth Pastoral Press, 2001), 13.

² Japan Times, “Young Recluses Find Rehabilitation” 10-24-03. *Hikikomori* refers to a recluse disorder lasting from 6 months to ten years.

³ 「バツイチ男の PTSD」『アエラ』03年6月23日号

⁴ 『女性自身』02年12月17日号

⁵ Mainichi “Moms Moan About Dads’ Lack of Parenting” 5-5-03.

⁶ 「わが子と犯人結びつく恐怖」『アエラ』03年8月4日号.

⁷ Japan Times “Child Consultations Hit Record” 6-9-03.

⁸ Japan Times “Battered Wives Battle Conspiracy of Silence” 2-27-02.

⁹ Japan Times “Japan ‘Abducted’ 200,000 Sex Slaves” 10-19-03.

¹⁰ Japan Times “Youth Sex on Rise, as are Serious Infections” 6-20-02.

¹¹ Mainichi “Dating Sites a Hotbed of Child Prostitution” 2-6-03.

¹² Weekly Playboy, 8/19-26, from Japan Times “How Lolita Spent Her Summer” 8-12-03.

¹³ 『SPA』02年7月23日号

¹⁴ Newsweek “Dangerous Liaisons” 9-16 & 23-02. Joint study by UCSF and Hiroshima University.

¹⁵ Mainichi “Japanese Workers More Tired of Work Than Ever” 8-26-03.

¹⁶ 「眠たくても眠らない」『アエラ』02年4月8日号

¹⁷ Mainichi “Childish Teachers Becoming Sexual Deviants” 12-22-03

¹⁸ Mainich “Depressed Dodge Therapy” 1-10-00

¹⁹ Ibid.

²⁰ Japan Times “Suicides Above 30,000 for Fifth Year” 7-26-03.

²¹ Newsweek “Finding the Asian Within” 2-10-03.

²² 『ダ・カーポ』03年5月21日号

²³ 『SPA』03年9月3日号 from Japan Times 10-6-03

²⁴ Mainichi “Moms Moan About Dads’ Lack of Parenting” 5-5-03. 47% to be exact.

²⁵ Japan Times 9-20-03

²⁶ Newsweek 6-9-03

²⁷ Japan Times “Birthrate Fall Said Best Remedied by Lending Women a Hand” 5-21-03

²⁸ 『アエラ』03年6月23日

²⁹ Japan Times “Single Moms Find Favor with Ministry” 10-31-03.

³⁰ George G. Hunter, *The Celtic Way of Evangelism* (Nashville, TN: Abingdon Press, 2000), 9.

³¹ Leonard Sweet, *Aqua Church* (Loveland, CO: Group, 1999), 13.

³² Simone Weil, “Illusions,” *Parabola*, vol. 28 no. 4, November 2003.

³³ **Japan Times “Minister Laments Japan’s Spiritual Vacuum” 1-1-02.**

³⁴ Kenneth A. Halstead, *From Stuck to Unstuck* (Bethesda, MD: Alban Institute, 1998), 12.

³⁵ Jean Vanier, *Becoming Human* (New York: Paulist Press, 1998), 73

³⁶ *The Holy Bible : New International Version*. 1996, c1984 (Heb 11:1). Zondervan: Grand Rapids.

³⁷ Leonard Sweet, *Soul Tsunami* (Grand Rapids, MI: Zondervan, 1999), 16.

-
- ^{3 8} G. W. Icenogle, *Biblical foundations for small group ministry* (Downers Grove, Ill. : InterVarsity Press, 1994)
- ^{3 9} S. Barker, *Good things come in small groups : The dynamics of good group life*. (Downers Grove, Ill. : InterVarsity Press, 1997), 121.
- ^{4 0} Larry Crabb, *Connecting* (Nashville, TN: Word, 1997), xi.
- ^{4 1} Ibid. xiv.
- ^{4 2} Henri Nouwen, *The Wounded Healer* (New York: Image Books, 1990), 72.
- ^{4 3} Rubem Alves, *Tomorrows Child: Imagination, Creativity, and the Rebirth of Culture* (New York: Harper & Row, 1972), 62.
- ^{4 4} Crabb xvii.
- ^{4 5} Leonard Sweet, *Soul Tsunami*, 58.
- ^{4 6} Rick Warren, *The Purpose Driven Church* (Grand Rapids, MI: Zondervan, 1995), 366.
- ^{4 7} Ibid. 378.
- ^{4 8} William C. Madsen, *Collaborative Therapy With Multi-Stressed Families* (New York: Guilford Press, 1999), 19-20.
- ^{4 9} Norman Brown, *Life Against Death*, in Alves. 63
- ^{5 0} Peter Kreeft, *Making Sense Out of Suffering* (Ann Arbor, MI: Servant Books, 1986), 12.